

内田百閒「昇天」論

——信仰と福音をめぐる——

山本有香

はじめに

内田百閒「昇天」は、一九三三年二月号の『中央公論』に発表された。語り手「私」が、以前同居していた女性が肺結核に罹患したことを知って入院先をたずね、そこでキリスト教の信仰を育む彼女を恐れつつ一方では過去の愛情に引き寄せられながら、その死までを見届けるという物語である。

こうしたあらずじや小説の題名からわかるように、「昇天」はキリスト教の信仰を主題としている。小説の発表時、百閒と同じ岡山県の出身で自ら信徒である正宗白鳥は、岡山孤児院のエピソードを含む多くの印象的な場面が用意されているながら、全体として「無理がなく」運ばれる物語の筋書きを高く評価した。¹⁾

しかしながらこうした同時代評が残る一方で、これまでに「昇天」を対象とした学術研究は管見の限り見当たらない。同様のケースは

百閒の著作においては実にしばしばあるものの、作家の生前から現在に至るまで多くのアンソロジーに加えられて知名度の高い作品である「昇天」が分析の対象とされてこなかった経緯ははっきりしない。ただ、特定の宗教が取り上げられ、なおかつそれが単に肯定または否定されるだけではない「昇天」の展開が、夢幻的な作風や孤高の作家という従来の百閒への評価では読み切れない側面を多く持っていることは確かである。

とはいえ百閒は「昇天」の十年以上前にも「白子」(『冥途』一九二二年、稲門堂書店)においてキリスト教の信仰に対する抵抗と神の「實在」を説明することの困難を取り上げ、また「昇天」の後に「補遺」として随筆風の短文「笑顔」(『東京朝日新聞』一九三六年八月五日朝刊)を発表している。²⁾ つまり少なくとも『冥途』から『旅順入城式』(一九三四年、岩波書店)に至る一九二〇年代前半から一九三〇年代半ばまでの十余年の期間の作品には、ノンクリスチャンの目でどのようにキリスト教の信仰に向き合えるかというテーマ

へのこだわりが垣間見えるといえよう。

本稿ではこれら三作品のうち、最も長尺で複数の場面にわたる筋書きをもち、百間自らも「物語ノ体」のある一篇として『旅順入城式』の巻頭に掲げた「昇天」を取り上げる。キリスト教に言及される点で共通する「白子」の記述も手がかりとしつつ、「昇天」においてその信仰の何が主題とされ、どのような解釈が試みられたのかを考察してみたい。

「昇天」の背景

「昇天」は肺結核にかかった元芸妓のおれい¹が「耶蘇の病院」と呼ぶ施設を主な舞台として展開する。この作品に対しては百間が自らの実体験を書いたものだという解釈があるが、作中には実際に「耶蘇の病院」をはじめとして実在の団体・施設・人物が数多く登場する。³小説の奥行きをよりの確に把握するために、内容の読解に入る前にこれらのモデルを確認しておきたい。

まず、おれいの入院する「耶蘇の病院」は、当時の救世軍杉並療養所と考えられる。救世軍杉並療養所は、一九一六年に豊多摩郡和田堀内村（現杉並区和田）に開設された。当時、救世軍の運営する病院はすでに下谷にあり、この療養所は結核患者を対象に、通常の治療に加え退院後の患者にも「コロニー」で身体的負担の軽い生活を送らせるという方針をとる施設として開所した。ある疾患の患者

のみを集住させるタイプの施設の例にもれず、当時の療養所の周囲は畑地の広がる人家のない地域であった。⁴

こうした療養所の特徴は、小説冒頭の「郊外の電車を降りて」人氣のない地区まで歩くとやっと着くという「耶蘇の病院」の立地に一致する。なお救世軍の名前は「私」が初めて面会に行った日におれいが口にしていく。

「本当はね、ここは耶蘇の病院なの」

「知ってるよ」

「私どうしようかと思ひましたわ。初めは何でも市の病院に這入れるやうな話だったのですけれど、病人が一ぱいで、空かないですつて。それから、おかあさんがお医者様と相談して、耶蘇の病院に入れると云ふんでせう。私、子供の時から、耶蘇は好かないんですもの。竹町の横町に救世軍があつて、太鼓をたたいてゐるから、うっかり聞きに行くと、中に這入つたら最後、戸を閉めて帰さないんです」

このように「耶蘇」と呼んでキリスト教を忌み嫌うおれいにとつて、「市の病院」に入院できず身を置くことになった病院は「気味がる」い場所だった。入院する前に住んでいたであろう花街の地域とも、住宅街とも隔絶した「耶蘇の病院」がおれいに不安を与えたことは容易に想像される。境界の地で自分とは異質な人々に出会う「冥途」⁵ 以来の話を踏襲しながら、その異質さをより現実的かつ直感的に理解しやすく形象化していることが伺われる。この点に

については次節で「白子」との比較においてより詳しく述べたい。

この「耶蘇の病院」を統括し、患者の治療にあたっているのが「院長先生」であるが、この人物のふるまいは前述の救世軍杉並療養所の初代所長・松田三弥に重ね合わせられる。室田保夫によれば、キリスト教徒で医師でもあった松田は、キリスト教の教えを説いて患者に慰安を見出させることを治療に取り入れていたという。

松田は遅々として進まぬ〔筆者注・結核〕治療の現状は当分続くとして、患者の精神状態を如何に安定させていくかが重要な課題だと述べている。「宗教上の最高理想を説き、精神療法をも加ふる」〔筆者注・「信仰と療病」(『済生』一九二七年四月)の引用〕と。救世軍療養所においては……精神療法として、一週二回患者職員一同に対してキリストの教を説き、宗教上の信仰を持つように努めている。(中略)松田の方針は科学的治療に加えて、精神教育・療法を重視するものであった。⁽⁶⁾

こうした患者への接し方は、信仰を勧める口調が「怖い」と同時に、不安を取り除こうと「やさしい事を云ふ」点で「やつぱり耶蘇」とおれいの説明する「院長さん」の言動を思わせる。その「院長さん」が松田同様おそらく患者に対する精神面のケアの一環として行っている「お祈り」の前の「演説」つまり説教の内容だが、これは前掲の正宗白鳥による時評の中で述べられているように、岡山孤児院の創立者・石井十次(一八六五—一九一四)と入所児童の姿を写したものと見られる。

それから、また院長さんが起ち上がった。力のない声の響が、その廊下の角になつた所に立つてゐる私にも聞こえて来た。

「それで皆さんはどう思ふ。お金はないのだ。有つただけは、みんなお米に代へて、みなし児に食はしてしまつた。もうお米もない。一粒もない。明日は、明日となれば、もう、いよいよだ。十人の孤児に食はせる物がないのだ。餓死だ。石井さんは十人の孤児を連れて、操山と云ふ山に登つて行つた。山は天に近いのである。自分達のお祈りの声が、少しでも神様に近く聞こえるやうに、と石井さんは思つたのである。操山の頂で、孤児達と共に、声を合はせて、一心不乱にお祈りをする。最早神様におすがりするより外に道はないのである。しかしまだ奇蹟は現はれない」

石井十次は岡山で受洗しクリスチャンとして社会福祉活動を行つた。一八八七年に岡山孤児院の前身である孤児教育会を立ち上げ、入所児童に養育、職業訓練、そしてキリスト教教育を施した。岡山孤児院は後年宮崎へ移転するが、二十年余りの岡山での活動によってその名が知られている。

またこの説教の中で「石井さん」が子供たちとともに神に祈る「操山と云ふ山」は、百閒の生家と同じ岡山市中心部(現岡山市中区)にあり、ふもとに多数ある寺社のうちの一つは百閒が療養中の父をみとつた場所でもある。⁽⁷⁾つまり岡山出身の百閒にとって石井十次と岡山孤児院は、日常生活の中で見聞きする郷土史の一部として

当然知っていた可能性が高いといえるだろう。

なお操山のエピソードは、そこで石井が祈ったという実話に基づくとみられる。山室軍平は、ある学生が岡山孤児院訪問に際して目にした場面として、操山での石井の祈りを『救世軍士官雑誌』上で紹介している。

行つて見ると、石井君は丁度その時、操山へ祈に行つて居らるるとのこと故、彼はその足で同じく操山に行つて見た。(中略) 耳を澄してその言ふ所を聞けば、「神様、三百人の子供が、今や食なき為に苦しまうとしてゐます。何卒直ちに然るべき道を開き給へ」と、祈つて居るのであつた。さうするうちに祈が済んで立ち上つたのを見て、青年は彼に近づき、之に挨拶して、ともに打連れて孤児院に帰ると、入口のところまで石井夫人が、「只今これがありました」というて、一通の書留郵便を彼に渡した。彼はすぐその封を押切つて見ると、中から金三十拾円の為替が出た。⁽⁸⁾

一読して明らかかなように、山室の記す内容は「院長さん」の説教と大まかな筋書きが重なる。しかしこの記述を前掲の「昇天」における説教の場面と比較すると、両者にはいくつかの違いがあることがわかる。

まず操山で祈る人数が、前者では石井のみだが後者では石井が「十人の孤児」を連れた十一人となっている。次に神の助けを求める理由が前者では「三百人の子供」が飢えているというものである

のに対し、後者では「十人の孤児に食はせる物がない」と述べられている。最後に祈りの結果、前者では「金三十拾円の為替」という形をとつて神が応えたとされる一方、後者では「まだ奇蹟は現はれない」というところで説教の場面が切れ、神の応答が得られたかどうかは明らかにされていない。

このように「昇天」中の説教と、石井十次の人となりを示すエピソードとして山室が挙げた内容は、孤児院の入所児童に与える食べ物や祈りの内容、そしてその結果が異なっていることがわかる。これらの違いからは、例えば郷土に伝わる逸話の一つとして自然に聞き覚えなど、かりに山室の紹介するエピソードそのものを百聞が見聞きしたのではないとしても、「昇天」のストーリーすなわちおれいをめぐる物語の効果を高めるためにその内容をいくらか改変したと考えることができる⁽⁹⁾。

こうして石井十次のエピソードを下敷きにしつつ、「金三十拾円の為替」のような実的な救いは望めないことの明らかなおれいに対して「院長さん」は「まだ、奇蹟は現はれない」(傍点筆者)という表現で、神の恵みがいずれはもたらされるであろうことを示唆する。言い換えれば「院長さん」は祈りが聞き届けられて為替を手にするのではなく、「奇蹟」を待つて子供たちと祈り続ける「石井さん」の物語を示すことで、おれいを含む患者たちに困難にあつて希望を持ち続ける精神の重要性を説いている⁽¹⁰⁾と考えられる。

「昇天」には以上のようなモデルや材料があるわけだが、こうした実在のキリスト者・教会の行いに共通するのが、社会的困窮者への伝道と支援を重視する「社会的福音」の発想である。社会的福音とは、近代資本主義社会の成立に伴って表面化した貧困などの諸問題に対して、キリスト教の福音すなわち「神は一人ひとりの人間に無条件の愛を注いでいる」という教えを根拠として解決に取り組もうとする運動の名称である。

この社会的福音については日本でも受容されており、“A Theology for the Social Gospel” (Walter Rauschenbusch, 1917, Macmillan, New York) の和訳『社会的福音の神学』が一九二五年に刊行されている。同書においては社会的福音の対象が「地上、即ち現在の社会生活」にあり「此の世界から罪悪を根絶し、救拯の使命を完成する事を以て其の本務として居る」ことが力説されている⁽¹⁾。また前述の山室軍平も『社会的福音の神学』和訳刊行の六年後、言い換えれば「昇天」発表の二年前、救世軍士官の立場から「救霊事業」と「社会事業」を二つながら実践することの重要性を説いている。

創立者が曾て言はれたやうに、「救世軍に於ては、救霊事業にあらざる社会事業なく、社会事業にあらざる救霊事業がない。

(中略) 私共は口で説教すると共に、手足で奉仕せねばならぬ。私共は放蕩息子が父に帰る所の救霊の運動をすると共に、必要ならばいつでも、亦善きサマリア人が、路傍の怪我人の為に尽したと同じやうな、社会奉仕を忘れてはならない。⁽²⁾

ここで引用されている「放蕩息子」や「善きサマリア人」のたとえからもわかるように、山室はキリスト教において罪悪とされる状態に身を置く者をすくいあげることを重視し、なおかつその働きは同じ信仰をもつ者同士の間に限られてはならないと述べている。つまり社会的に困窮しており、キリスト教の教えをまだ受け入れていない者が「救霊事業」と「社会事業」が一体となった救世軍の伝道の対象であったといえる。それが作中ではおれいに当たることは明らかだろう。

このように「昇天」からたどれる複数のモデルは、いずれも社会的福音の理念に発した社会福祉事業に取り組むキリスト者・教会による社会福祉施設である。したがって「昇天」は社会的福音を背景とする小説であるといえるわけだが、語り手「私」の病院やおれいの信仰心に対する印象からは、そのような実際の社会的機能という枠組みを認めざるを得ないながらも、神への信仰を不気味に思い退けようとする感情の交錯が読み取れる。次節ではこうした信仰との向き合い方を把握するために有効な比較材料となると思われる「白子」の内容と主題を概観する。

「白子」から見た「昇天」読解のかぎ

「白子」は「昇天」の発表をさかのぼること十年余、同じく『冥途』(一九二二年、稲門堂書店)に収められた掌篇五作とともに『新小

説』一九二一年四月号に掲載された。タイトルの「白子」は後述するように、かつて体の色素が少ない人を差別的に指した語と、魚の精巢の両方の意味が含まれている。「私」が神の存在を認めるよう迫られる集会所で足元にうごめいているのが「西洋人の様な顔をして」「ぷりぷり」した体を持つ生物、すなわち「白子」である。この「白子」に出会う前、物語の冒頭における「私」の心の中では次のような議論が繰り広げられている。

神があると云ふ者と、ゐないと云ふ者の間には、そのゐるとかゐないと云ふ言葉が、食い違つてゐるんだ。自分が神はゐないと云つたからつて、それは神があると云ふ者のつかつたゐると云ふ言葉を、否定にしたのではない。(中略) 神がゐないと云ふ者も、その否定する前に、一先づ自分の神を認めた事になつてしまふ。彼は否定する為の神を祀つてるぢやないか、どうだと私は独で駄目を押しして、益むしやくしやして来た。

神の存在について論じる際に、それを否定するにも「神」という言葉を口にせざるを得ないことに「私」は腹を立て、「兎に角神はゐない」と思おうとする。しかしその途端見知らぬ女から「それは貴方いけませんです。神様はゐらつしやいます」と言われ「耶穌教」への改宗を迫られる。やがて女の子供と思しき「白子」を踏み潰した「私」は「お験し」を見たのだから神の存在を信じよと追い詰められ、なぜかこみあげる笑いの中で「ゐます、ゐます」と神の存在を認める言葉を口にす。これが「白子」の筋書きだが、物語の中

心には「昇天」同様、神を認めること、信仰を持つことが据えられている。そしてやはり「昇天」の場合と同じく「私」と神や信仰の間には深い溝がある。

従来の「白子」に対する読解では、結末における「私」の笑いに焦点が当てられ、それまでの神学的思惟やキリスト教信徒との衝突を「無効化」したり⁽¹³⁾、問題の焦点を「より実在的なものの側にずりおち」させたりする機能が見出されてきた。こうした「落ち」のある物語という比較的単純な評価に対して、複数の百閒論がありキリスト教文学の研究にも取り組む吉川望はより具体的な読解を試みている。吉川は『冥途』の多くの作品同様に一見不合理で不可解な「白子」の物語を、キリスト教的「回心」の文脈に沿って細部を読み直すことで「信仰をめぐる〈内心の反駁〉と再定位した。

この主題を析出するにあたり、吉川はキリスト教の信仰をめぐる「私」と信徒の衝突という物語の筋書きに二点の作家論的背景を指摘している。一つは「白子」に着手した時期の百閒が、どのような宗教であれ理屈ではなく信者の信仰が救済をもたらすと述べた「漱石全集」の「日記及断片」の箇所を⁽¹⁴⁾読んだであろうこと、もう一つはそれ以前の岡山時代にクリスチャンの友人から影響を受けた可能性があるということである。そして同作における百閒の試みを次のようにまとめる。

「白子」は、キリスト教の教義を作品に取り入れつつ、神なるものが存在することへの漠たる恐れを抱えながらそれに向き合

うこのできない感覚を描き、信じるということ自体どういうことなのかを、すなわち、実感なき信仰などあり得ないのではないかとということの主たる問題としたのだ。ここに、漱石の「日記及断片」の記述を受容し、真摯な信仰者の心に触れた百閒による、「筆者注・「夢十夜」の」「第三夜」「第七夜」とは別個の課題と表現が成立していると述べることができるだろう。¹⁶⁾

このように吉川は「白子」を「神なるものが存在することへの漠たる恐れ」と「実感なき信仰などあり得ないのではないか」という投げかけの二点を描いた作品として性格づけている。ここで信仰の根柢に挙げている「実感」とは「白子」を殺したという「自身の罪」を意識することで神に立ち返るといふ精神的な変化をさす。「私」の場合は「理屈と感覚との懸隔」のために、回心の過程を理解していながら「恐れ」がそれを妨げるといふのである。

「私」の独り相撲の議論を吹き飛ばしてしまう点で、たしかに作中において殺しの罪の自覚は大きな「実感」の役割を果たしている。しかしそのような「実感」によって回心のきつかけが与えられた「私」とキリスト教を隔てるのは神への「恐れ」ばかりでなく、これを「耶穌」と呼ぶような前近代以来の差別意識であり、「耶穌教」に「なるものか」という忌避の態度でもある。

また作中では「私」を勧誘する男女も、未信者に神を受け入れさせるためには実力行使も厭わない狂信的な姿で描かれる。こうした作中の表現を踏まえると、「白子」は神の存在を認めることへの「恐

れ」よりも、神の不在にこだわるノンクリスチャンの「邪宗」に対する否定的感情が前面に見られ、キリスト教蔑視の色合いも強い作品のように思われる。

むしろ吉川の述べる神への根源的な「恐れ」が信仰への道を妨げるといふ見方は、「昇天」にこそふさわしいのではないだろうか。また吉川が「白子」が扱っていないと指摘した「罪の自覚と悔い改め」や「恵みや喜び」としての信仰という「より本質的な部分」も、「昇天」には容易に見出せる。このように信仰や神という主題を共有する二作品を比較することで、「白子」から「昇天」に向けて主題の変容もしくは拡張・厳密化の様態が明確化されると考えられる。つまり「白子」は、キリスト教的文脈で「昇天」を理解する際の有効な比較材料になるのである。そこで本節の最後に「白子」における信仰の主題とはどのような性格のものかを、作品の題名でもある「白子」を手がかりとして考察する。

「白子」はいうまでもなく作中で重要な役割を果たす。それは信徒の女の子供として「私」の否認の意思を攪乱し、踏み潰されてなお「私」に対する女の強迫行為をエスカレートさせる動機としてはたらくというものである。

ちつとしてみると、著物の裾の中に這入つて、白子の顔や手足が私の肌に触れさうに思はれた。私は地団太を踏んで、白子を足許から振り払はうとしてゐる内に、冷たい柔らかいものが私の足に触れたので、到頭私は夢中になつて馳け出した。すると

まだ三足か四足しか歩かない内に、私は一人の白子を踏み潰した。何だかぶりぶりした様なものを踏んだと思ふ途端に、もうその白子は死んでゐた。(中略)

「貴方はこんなお験しに遭つても、まだ神様のいらつしやる事を信じませんか」と云つた。私は可笑しくて堪らないから、夢中になつて、「あるよ、あるよ」と云ひながら笑ひつづけた。

ここで女が「お験し」と呼んでいるのは前述の「白子」で、「私」によれば女の子である。⁽¹⁷⁾「西洋人の様な顔」をした、「白い毛」のある「ぶりぶりした」「薄白い塊」で「鶏の雌の鳴く様な声をたてる」⁽¹⁸⁾様子から分かるようにこの「白子」とは、半分は魚の精巢の白子、半分は侮蔑的な表現で体の色素が少ないことを指している。

前者の意味は内田道雄が「生命の原型質的な形としての白子なるもの」と述べているように、意識としての自己を持つ以前の生命そのもの、もしくはさらにそれをさかのぼる存在の核のようなものを示していると思われる。一方後者は、古来からまれにしか現れないとして白い動物に見出されてきた瑞兆・凶兆すなわち「お験し」としての側面を表している⁽¹⁹⁾と考えられる。女は「白子」という「お験し」が神の存在を認める根拠になるはずだと「私」に迫っており、作中においても「白子」が非現実的な存在と捉えられていることがわかる。

ところで作中の「白子」はやや唐突ながら、『遠野物語』に記されている話の登場人物といくつかの点で一致を見る。またこの「白

子」の話の前段には幕末の頃「西洋人あまた来住」していた地域で密かに行われた「耶蘇教」について記されている。

八四 (前略) 耶蘇教は密々に行はれ、遠野郷にても之を奉じて磔になりたる者あり。浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合ひては嘗め合ふ者なりなど云ふことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合の子中々多かりしと云ふことなり。

八五 土淵村の柏崎にては両親とも正しく日本人にして白子二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七位なるべし。家にて農業を営む。語音も土地の人とは同じからず、声細くして鋭し。⁽²¹⁾

一読してこれら二つの話は〈耶蘇教—西洋人—白い体〉という連想で並べられていることが推測できる。そしてこの連想における三要素はすなわち、「私」が遭遇した「白子」という存在の要約的説明になっている。もちろん百問が日常生活の中で例えば「耶蘇教」を信じる「西洋人」と出会い、さらに当時「白子」と差別的なニュアンスで呼ばれたような身体的特徴をもった人々を目にしてそこに類似を見た可能性もないわけではない。しかしかりに『遠野物語』のこれらのくだりが「白子」執筆のヒントになったと考えれば、なぜ神の存在を証拠立てるのがこのような「白子」なのか、前述の魚の精巢、つまり命や存在の核という側面を考え合わせることである程度合理的な説明がつかだろう。

このように「白子」の物語における「お験し」には多分に民俗的

な伝承の色合いが濃く、日本列島の多くの場所での顔かたちから「異人」と呼ばれた人々の身体的特徴をもつ架空の生き物が前面に出ている。言いかえれば「白子」が「お験し」とされるのは「西洋人の通り」にからだ全体が白いからにはかならない。こうしたモチーフの扱いはキリスト教に関わる伝承や聖書の物語というよりも、むしろ東アジアの民間伝承を思わせる。

「耶蘇」の女がそのようなキリスト教と無関係な「お験し」によって「私」に回心を迫るのが「白子」の物語だとすると、この一篇は宗教的に目立ったところのない作家である百閒の作品にも信仰という主題が認められることを示す一方、ある一つの宗教を想定して内容を評価できる性質のものではないと思われる。前述の吉川論では「白子」の内容にはキリスト教の教義への理解が不十分な点が見られることが指摘されていたが、実際に執筆時点での百閒の理解が浅かった可能性を認めると同時に、信仰を物語においてどのように形象化すべきかつかみかねていたと考えることも可能だろう。

「昇天」における回心の過程

「白子」ではキリスト教の信徒の性質が面的であるだけでなく、主題としての信仰の範囲も特定の宗教を対象としたものではなかった。一方「昇天」ではすでに見たとおり、実在のキリスト教会やキリスト者、関連の社会福祉施設・医療施設がモデルとして物語中に

取り込まれており、「私」がキリスト教を不気味に思い否定的な感情を抱いていることと、孤児や結核患者の受け入れなど社会的福音の立場から福祉の役目を果たしていることの両面が描かれている。

またそのような実在の事物を作中に取り入れたことで、「昇天」における「私」とキリスト教との出会いも「白子」とは異なっている。前述のように「白子」では「兎に角神はゐない」と断定する「私」の心を読んだように信徒の女が突如現れ、回心を迫っていた。しかし「昇天」では冒頭の一文にあるとおり、以前に同棲した相手を見舞った先が実は「耶蘇の病院」であるという経緯でまずは舞台設定にキリスト教の影が現れ、物語が進むにつれてそこで実際にどのような宗教教育や典札、そして教えに基づくケアがなされているかを「私」は徐々に見聞きし理解していくことになる。

こうした両作品でのキリスト教の扱われ方をそれぞれまとめれば、「白子」でのキリスト教とは信徒の不気味さや強引さを示唆する属性に過ぎず、スラップスティックな展開を補強する材料であるのに対し、「昇天」の場合は主にプロテスタントによる社会的福音が一篇の不可欠な背景として置かれているということができよう。その違いだけでも、「昇天」ではすでに述べたような「白子」に見られる信仰の主題が深められているであろうことが推測される。

本節と次節ではテキストの読解を通して、こうした主題について「昇天」においては信仰の中でもとりわけ福音を信じるか否かといういずれかの選択に至るまでの過程が物語を形成していること、同

時に福音を信じる過程で自らが置かれた状況によって独自の神理解が生まれ得ること、そしてそのような理解の一つとしてカトリック教会の伝承を引用したおれいの二度の「昇天」が描かれ、一篇の主題を形象化した場面となっていることを指摘する。

まず「昇天」の中で直接には言及されないながら大きな役割を果たすのが、神から全ての人に無条件の愛が注がれているという教え、すなわち福音である。それはすでに示したような社会的福音に基づいて運営されるキリスト教会の施設が物語の舞台であるというだけではない。信仰に入るといふ観点で見れば、そのような福祉によって医療を受けるなど実際のな面で救われていながらキリスト教を拒絶していたおれいが、主に「院長さん」の言動を通じて、やがて福音を受け入れていくというのが物語の筋書きだからである。

ここで語り手の「私」は、おれいの急速に育っていく信仰心を追跡する役割を担っている。超自然的な体験を神の起こす「奇蹟」と受け止めるおれいの姿を「私」は恐れをもって語るものの、強いて彼女を止めることはなく過去の愛を思い出しながら繰り返し見舞いに訪れる。また登場人物としての「私」自身はおれいのように強く神に引きつけられることはないが、信仰に入っていく彼女には後述するように恐ろしさと美しさを同時に感じている。

以上のようなおれいと「私」の関係を踏まえた上で、おれいが「私」に見せる変化を順に確認していきたい。作中で「私」はおれいを四度訪問する。最初の訪問では、おれいは「私」に自分のいる

この場所が実は「耶蘇の病院」であることを伝え、救世軍の宣教を回想して「子供の頃から耶蘇は好かない」と述べている。しかし二度目に見舞ったときには入院生活を送る中で「耶蘇」の教義に興味を持ち始め、それに応じてか「不思議な事」を体験していると語る。

「そのお話を聞いて、後でお祈りなさるのよ。ですから、この病室の人は大概みんな信者ですわ。そのお話し、私にはよく解らないんですけど、それでも、伺つてらうちに、段段有りがたくなつて来るらしいわ。この部屋の人が、あとでみんな声をそろへて、お祈りの事を云ふんでせう。アーメンと云ふのは私だつて云へるけれど、でも、その後で咳き入る人が随分ありますのよ」

「そんなに、話しつづけると後でつかれやしないか」と私がか心配して云つた。

「ええ、でも何だか不思議なんですもの、それ以来、私、かう目をつぶつてゐても、いろいろの物が見えるらしいのよ。指を幾本か出して、目蓋の上に持つて行くと、ちゃんと、その数だけ、指の形が見えるんです。奇蹟と云ふのでせうか」

おれいは千里眼²²のような能力を得た（と感じている）ことを信仰によるものと考えている。しかしそれが病気の治癒や心の平安をもたらすわけではない。つまりおれいという「奇蹟」とは必ずしも神の恵みによる事態の好転を指しているわけではなく、それが人間の考えや力を超えたレベルでもたらされるという超自然的側面だけを

取り出しての言い回しであることが窺われる。科学的に説明のつかない現象を神の存在の証拠と考える発想は、前述の「白子」における「お験し」に近いともいえよう。

ただ同時にこの段階でおれいが「耶蘇」について「だんだん有りがたくなつてくるらしい」と述べていることも無視できない。おれいがそう感じたのは、おそらく教義の根幹である福音に対してであろう。おれいの口から語られているように、彼女は両親を亡くしており置屋の主人が今は「おかあさん」であり「おあいちゃん」という同輩がいる。また「私」の回想によれば落籍させて共に暮らしたこともあったが、破局の末再び芸妓に復帰したという。

こうした登場人物の言葉から読み取れるおれいの人間関係は、金銭を中心にして結びついたものといえる。「おかあさん」は雇用主であり、「おあいちゃん」も同僚にすぎない。共同生活を通して「家族同然」のような感情が互いの間に育まれていたかもしれないが、結核にかかり勤務も共同生活もできなくなればその関わりは急激に弱まってしまふ。

一方「私」にとつておれいは過去に「涸れ尽くすほど愛した」相手とはいえ、彼女を引き取るにあたって「おかあさん」に少なくない額の金銭を支払ったことは明らかである。また詳しくは語られないものの、おれいが再び芸の道に戻る際にも三者の間にさまざまなもつれがあったらうことは想像にかたくない。「私」と彼女の関係は、いわゆる「素人」同士が共に生活を始め、終える場合とは大

きな差があるといえる。

対照的に、神から全ての人に注がれる愛である福音は金銭とは無関係である。むしろ現実的には、教会が社会的福音を事業として実践しようとする場合、実業家に経済面の支援を依頼することはある²³。しかしいわばその受益者で、なおかつ神の道に入つて間もない信徒でもあるおれいにとつて、福音という教義によつて結ばれる神との関係は芸妓と抱え主のそれはまったく異なり、金銭によつて自分の立場が左右されることはほほないと考えられる。また元芸妓という経歴も、回心すべき「悪」としてみなされることはあつても信仰に入る以上はむしろ「大きな喜びが天にある」²⁴とされる要素になる。

こうして芽生えたおれいの信仰心は、おそらくはキリスト者である「院長さん」の日々の励ましを受けて教義や聖書の物語に関する知識が蓄えられることでさらに強められていく。おれいの変化は「私」が見ない間にも進行しており、「私」は「基督様を拝むのだとおつしやつて」おれいが夜間に徘徊しようとしたことを病院の職員から聞かされる。

先ほど述べたようにおれいは「子供の頃から耶蘇は好かない」のであり、入院してからも「耶蘇」と呼ぶ蔑視の態度は変わらなかつた。それが職員の話によれば「基督様を拝む」ために止める相手も驚くほどの力で押しつけるようになったという。職員からの伝聞であるとはいえ、「拝む」以上は「基督様」という言葉もおれいのも

のだろう。おれいのキリスト教への関わりは、ほかの患者の祈りを見て「難有い御宗旨のやう」だと印象をもつ段階から、ここでは明確にキリストすなわち救い主イエスの信仰へと大きく踏み出していることが読み取れる。

「昇天」の失敗とおれいの神理解

このように「耶蘇の病院」で療養する間に、おれいは信仰を深めていくが、やがて周囲から「エス様のお話を聞き違へていらつしやる」と言われるような独自の理解をも展開するようになる。それを表すのが小説の題名でもある「昇天」の試みであり、「院長さん」を「エス様の仮りのお姿」とする解釈である。まず「昇天」は、再び「私」が同じ病院職員から教えられた話として示される。

はい一昨晚の、まだ宵の口で御座います。いきなり御自分のベッドの上に取り直つて、それから、そろそろとお立ちになつたさうですが、同室の人が見て居りますと、妙な手つきで、胸に十字を切つて、さうして、ふらふらとベッドの上を歩き出されたと思つたら、もう床板の上に落ちて、氣を失つて居られたさうで御座います。(中略) どうも何か、エス様のお話を聞き違へていらつしやるらしいとか、先生方の御話で御座いました。昇天でもなさるおつもりではなかつたか知らと云ふ様な事を、皆様で御話しになつていらつしやいました。

おれいの容体は悪化しており、高熱によつてこうした奇行に出たとみなされるが、同時に自分の死を予感しての行動、すなわち聖母の姿を模倣してイエス・キリストのもとを目指したとも考えられる。というのもここでのおれいの様子は、キリスト教の歴史の中で長年伝承され、繰り返し宗教画の一テーマとされてきた聖母被昇天の代表的な図像の再現となつていからである。

聖母被昇天は聖書に記述のないカトリック教会内の伝承で、聖母マリアが地上での生涯を終えたのちその肉体と魂が共に天に上げられたというものである。ティツィアーノ、ルーベンス、エル・グレコらに代表される聖母被昇天を題材とした絵画はしばしば、生前の姿のまま雲の上へと昇つていくマリアを天使が取り囲み、地上の人々がその様子を仰いでいるという構図で描かれる⁽²⁵⁾。

天使こそいないが、右の場面がベッドの上を歩き出すおれいとそれを周りの病床から自然と見上げる患者や職員たちによる聖母被昇天の構図を見せていることは「昇天でもなさるおつもりではなかつたか」という一言からも明らかだろう。しかしもちろん、聖母ではないおれいは「昇天」に失敗しベッドから転落してしまう。以前、透視を「奇蹟」と呼んでいた彼女は「昇天」が自分の身の上にも起こりうると思つたのかもしれない。そのような神秘的な現象を通じて神の存在を認めつつあったおれいの信仰は、ここでの失敗によつて次のような解釈へと変容する。

「それが、何つてはつきりわからないんですけれど。でも私、

今まで間違つてゐたと思ひますわ。院長先生は、エス様の仮りのお姿なのよ、きつと。私がエス様の事を思つてると、いつでも、きつとなのよ、院長先生が、窓からお覗きになるんですもの」

「さうかも知れないけれど、おれいさんは昔からよく信心してたんだから、エス様も外の神様もおんなじ事なんだから、あんまり考へ過ぎて、迷つてしまつてはいけないんだよ」

おれいが辿り着いたのは、空を昇つていった先に「天国」があり「エス様」がいるのではなく、自分が心の平安を得て今いる場所が「天国」であり常に見守つてくれる「院長さん」こそが「エス様」なのだといふ理解だった。おれいは入院当初「院長さん」の「怖い顔」を磔刑のキリストに似ていると述べていたが、ここではむしろその凶像の聖書的な意味である愛の行爲を行なつた救い主という性質を「院長さん」に見出していることがわかる。

こうしておれいは「神は存在するか」といふ問いと「神は何者か」といふ問いへの答えを同時に見出した。すなわち社会的福音の受け手として自分が生活する病院という場に神は存在し、その病院全体を動かしながらおれいに希望を与え続ける「院長さん」が神という理解である。

もちろんこうしたおれいの理解は「世界」を自らの生活の場だけに狭めることで成り立っており、「院長さん」もまたあくまで一人の人間に過ぎず病院外での働きは限られていることを考えても、一

般的なキリスト教の信仰のあり方を逸脱した部分があることは確かである。さらに「仮りの姿」といふ発想も、キリスト教というよりはやはりアジア圏の神話・伝説にしばしば見られる神仏の「やつし」に近い。

とはいえ前述のようなおれいの来歴を踏まえれば、全ての人に無条件で愛を注いでいるとされる神との個人的な結びつきを感じるためには、「昔からよく信心してた」対象である寺社に祀られた神仏と衆生という既知の関係の参照は必要なことであつたと考えられる。その結果として、前述の「白子」では「私」の神をめぐる概念的なつまずきの中で問うことすらできなかったこれらの問いに、「昇天」においてはそれなりに完結した答えが示されたといえる。こうしておれいは自分の置かれた状況のなかで神を「理解」し、福音を受け入れたのである。

このように「昇天」はおれいの信仰の目覚めと発展を描くことで一篇が成り立っているが、結末にはその後日譚として「私」によって彼女の死がごく簡潔に語られる。

十二月二十五日、小春のやうなクリスマスのお午におれいは死んだ。付添の看護婦に蜜柑の皮をむいて貰つて、半分食べた儘、死んださうである。

急変の知らせを受けて、駆けつけた時は、間に合はなかつた。おれいは奉安室に移されてゐた。

先ほどのおれい本人による「昇天」は失敗に終わったものの、そ

のような試みをせずとも結果的に彼女は天に召されることになった。それが「小春のやうなクリスマスのお午」という穏やかで祝福された日付である点からも、今度の「昇天」が信徒のいわば一方的な神への接近ではなく、神から「時宜にかなって」⁽²⁶⁾もたらされた出来事として位置付けられていることが読み取れる。

また最後の一文に登場する「奉安室」とは、生前のおれいが「私」にその意味を尋ねた言葉である。「廊下を一つ間違へ」て出くわした部屋の看板の漢字をおれいは「一つひとつ説明し、「中に灯りがついて、綺麗に飾つてあるから、何かしらと思つた」と語る。文字通り一つ間違えればいつ死を迎えるかわからないおれいに対して説明することはできないものの、それが「屍体収容室の事を云つて居るに違ひな」いことを「私」はすぐに理解した。

この場面における「奉安室」と「屍体収容室」の違いは、おれいと「私」の宗教的な立場の違いを明瞭に浮かび上がらせていた。言葉の意味を知らないおれいは病院の用いる呼称をそのまま記憶するほかなく、部屋の名前として受け入れるが、「私」にとつてそこは天の国とも神とも関係のない「屍体」が「収容」される場所だった。しかし結末では、この時の「奉安室」という呼び方が「私」によつて用いられる。おれいの死を語る「私」にとつて、息を引き取つて間もないおれいは「屍体」ではなく、魂が天へと昇りつつある「安んじ奉る」べき一人の人間であつたことがわかる。このように結末の後日譚からは、一度は失敗したおれいの「昇天」が神の手で改め

てなされたと同時に、「私」にとつてもおれいの死が「昇天」と見えたこと、つまりおれいのように作中で回心するまでには至らないながらも「私」にも神の存在が感じられたことが窺われる。おれいによる試みとしてのそれと、「私」の変化をも暗示する結末の二度にわたつてなされた「昇天」は、進行と福音をめぐる一篇の主題を形象化した場面といえるだろう。

おわりに

以上、本稿では「昇天」におけるキリスト教の信仰の主題について、物語の背景となつた実在のキリスト教会・キリスト者、同様の主題を取り上げた点で先行する「白子」、そして両者を踏まえた上でのテキストの読解を通じて検討してきた。以下では本稿の試みを振り返りながら今後の展望を述べたい。

まず物語の背景について、物語の主な舞台である「耶蘇の病院」は当時結核の専門院であつた救世軍杉並療養所をモデルとしていであろうこと、そして「院長さん」も同じくその初代所長である松田三弥を参考とした登場人物と見られることを確認した。また「院長さん」の説教の内容として言及される「石井さん」のエピソードは、岡山孤児院の創立者・石井十次にまつわる逸話を一部改変したものであることを指摘した。こうしたキリスト教会やキリスト者の事業が、二〇世紀にプロテスタントの間で提唱された社会的福音の

実践である。以上のモデル論的検討から、物語の舞台が社会的に周縁化された存在としてのおれいに神の福音を知らせる場の役割を果たすことが明らかとなった。

次にキリスト教の信仰を物語の中心に据えている点で「昇天」に先行すると位置付けられる「白子」を取り上げ、先行研究を踏まえた主題の検討を行なった。そして同作においては信仰や神という言葉の意味するところが「昇天」ほどには具体化されていないこと、言い換えれば「白子」で扱われなかった信仰をめぐる主題が「昇天」では取り上げられ、発展しているのではないかという仮説のもと、「白子」を比較材料とした「昇天」の読解を試みた。その結果、神の存在については「白子」も「昇天」も神の恵みとは無関係に見える超自然的な現象が根拠に挙げられていたものの、後者では教義に対する評価が述べられ、キリスト教の福音によって救いがもたらされる可能性にも言及されていることがわかった。

以上のような「昇天」の物語の背景と先行テキストの参照から、同作では信仰の入り口にして中核である福音を受け入れるか否かという主題が扱われていることが明らかとなった。これを踏まえて「昇天」テキストの読解を行い、福音を信じるか否かといういずれかの選択に至るまでの過程が物語を形成していること、同時に福音を信じる過程で自らが置かれた状況によって独自の神理解が生まれ得ること、そしてそのような理解の一つとしてカトリック教会の伝承を引用したおれいの二度の「昇天」が描かれ、一篇の主題を形象

化した場面となっていることを指摘した。

おれいの物語から浮かび上がるのは、信じる者の身近に神の存在を見出させ安息をもたらす福音を受け入れるにあたっての、その信仰が各人の置かれた状況によって極端な神理解に基づくものとなる危うさと同時に、自らと神を結びつける個人的な物語が介在することの必然性である。このように「昇天」はキリスト教を対象として、その信仰の入り口である福音を信じるか否かという選択がどのようになされ得るかを描いた小説といえる。さらにこうした信仰と福音をめぐるテーマは、「昇天」補遺」と副題のつけられた「笑顔」において「私」の郷里の思い出とおれいの死の前後の模様という二つの記憶の交錯を通じて再び触れられており、百閒が少なからず関心を払っていたことが窺われる。

なお本稿では、「昇天」の「私」における信仰のあり方を取り上げることができなかつた。「白子」においては不完全ながら信仰に接近した一人称の語り手「私」に「昇天」の「私」との連続性を見るならば、主題のより適切な把握のためにはおれいだけでなく「私」にとって信仰とは何であるかを考察する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

(1) 正宗白鳥「昇天」並に「東は東」は可「読売新聞」一九三三年一月二十九日。

(2) 初出時は連載「短夜随筆」の(一)として掲載され、題名に「昇天」と

の関わりは明示されていない。「昇天」補遺の副題は「北溟」（一九三七年、小山書店）収録時に加えられ、以降これが全集や文庫などで基本的に踏襲されている。

(3) 後年の随筆には「おれい」にあたると思しき天折した女性に触れている箇所があるため、必ずしも「昇天」の物語が百間の実体験ではないとは言切れない。

(4) 「救世軍療養所一斑療養所と附属保養者コロニーの実況」（救世軍療養所、一九三四年）『近代都市の衛生環境 東京編17（病院8）』近現代資料刊行会、二〇〇九年。

(5) 真杉秀樹「内田百間の世界」教育出版センター、一九九三年）など、『冥途』の諸篇に怪奇に出会う場所として「土手」が頻出することは、百間の作品を「幽明の境」や「中有」という言葉で性格づける際にしばしば指摘される。このほかにも「橋」、「辻」、「坂」など古典的な境界のモチーフが繰り返し現れるほか、『旅順入城式』では「廊下」「舞台」が同様の役割を負っていると考えられる。

(6) 室田保夫「松田三弥——一救世軍医師の足跡」『キリスト教社会福祉思想史の研究 「二国の良心」に生きた人々」不二出版、一九九四年。

(7) 瑞光山仏心寺。『百鬼園日記帖』（三笠書房、一九三五年）をはじめとして、百間は早くに亡くした父について繰り返し日記や随筆で言及している。

(8) 山室軍平「一基督者としての石井十次君（一）」『救世軍士官雑誌』一九三三年五月。ただし同誌は非売品で「救世軍士官の為に発行する雑誌にして士官以外の手に入るを許さず」と毎号の表紙に書かれている。山室が同内容の文章をより一般向けの雑誌に寄せた可能性もあり、百間が実際にこの記事参照したかどうかは不明である。

(9) あるいは「作者の意図」にこだわらずとも説教中の「石井さん」が岡山孤児院の創立者・石井十次だと読める以上、その内容が「原作」との相違を含めて「昇天」全体の物語に関わりをもつと考えることは自然だといえる。

(10) 苦しみの中にあつて神への信頼を保つことの大切さは「主を待ち望め」（詩編二七・一四、新共同訳。以下、聖書箇所の記事番号はすべて新共同訳による。）をはじめとして聖書の随所で繰り返し返される。説教における「石井さん」のエピソードの趣旨を踏まえれば、「私」の聞いた部分の後はそれを示す聖書箇所が朗読されたのではないかと推測される。

(11) 「社会的福音の神学」友井禎訳、日本基督教興文協会、一九二五年、四五ページ。

(12) 山室軍平「各小隊は貧民伝道に参加せよ」『救世軍士官雑誌』一九三一年五月。

(13) 山口徹「冥途」にさすらうことば『日本近代文学』二〇〇〇年五月、日本近代文学会。

(14) 内田道雄「冥途」から「山高帽子」へ『内田百間——『冥途』の周辺』翰林書房、一九九七年。

(15) 「断片四A」『漱石全集』第十九巻、岩波書店、一九九五年。和訳は同書収録の岡三郎・石崎等「注解」を参照。

(16) 吉川望「白子」論——信仰をめぐる〈内心の反駁〉『日本文芸研究』二〇一七年三月、関西学院大学日本文学会。

(17) 吉川望は前掲論文で「お験し」は「白子殺し」だとしているが、その場合この言葉は「おしるし」ではなく神に与えられた試験という意味で「おためし」と読まれるものと思われる。本稿では「おしるし」と読んで「私」の「白子」との遭遇を指すという読解をとる。

(18) 百間は幼少時に飼育していた鶏が近親交配を繰り返すうち性質が変わって奇形のある個体も現れ、やがて牝鶏が関をつくるようになったのを聞いて恐怖を覚えたこと記している（「牝鶏之晨」『文学』一九三五年一月）。「白子」の声の特徴は「遠野物語」八五の記述との一致に加え、生命の禁忌にふれることへの罪悪感を示唆すると思われる。

(19) 注(15)文献に同じ。

(20) こうした見方を人間に適用することが差別の原因となってきたことはい

うまでもない。百閒も柳田も、民間伝承の中のそのような問題点を必ずしも乗り越えているとは言えない点には注意が必要である。

(21) 佐々木鏡石述、柳田國男『遠野物語』一九一〇年。

(22) 千里眼は一九一〇年前後に千里眼をもつと称する人々が論争の対象になるなど、人心を乱すオカルトとして受け止められた（一柳廣孝「千里眼と科学」『こっくりさん』と〈千里眼〉・増補版』青弓社、二〇二一年）が、このころ青年期の百閒はメーテルリンクの翻訳を試みるなど同世代の作家たちと同じく神秘主義に傾倒していた。「昇天」の随所に見られるキリスト教への不気味な印象は、宗教における秘儀の神秘性になお関心を抱いていたことを窺わせる。

(23) 現に前述の救世軍杉並療養所の創設にあたっては、渋沢栄一や大隈重信が協力した。

(24) ルカによる福音書一五・七。注(13)文献の山室軍平もこの「放蕩息子のたとえ」を引用している。

(25) 日本においてはルーベンスの作品が『白樺』に部分的ながら掲載されたほか、遅くとも一九一〇年代には小説の翻訳や随筆にも聖母被昇天への言及が見られる。

(26) ヘブライ人への手紙四・一六、コヘレトの言葉三・一一など、出来事にはそれぞれ起こるべき時があり神の支配下で実現するという発想は聖書の随所に見られる。